

大正・昭和のモダン音楽を発信 ー日本初の電気吹き込みツルレコードー

音を録音し再生するシステムは、1877(明治10)年にトーマス・エジソンが世界で初めて成功させたフォノグラフである。錫箔を貼った真鍮の円筒に針で音溝に記録するというもので、基本原理は、後のレコードと同じである。その後、1887(明治20)年にエミール・ベルリナーが円盤型の録音盤を利用したグラモフォン(SPLレコード)を発明、現在のレコードシステムの原型となった。

初期の円盤式レコードはホーンで集音した音の振動を音溝カッターの刃に伝え音溝を生成する機械式録音だった。技術の発達により、マイクロフォンで集音した音を電気信号に変換、増幅して電磁式カッターで音溝を生成する電気式録音(電気吹き込み)に進歩した。この電気吹き込みを音楽に利用したことで、レコードの音質が飛躍的に良くなり、再生できる音域も広がり、音楽の領域に画期的な影響を及ぼした。

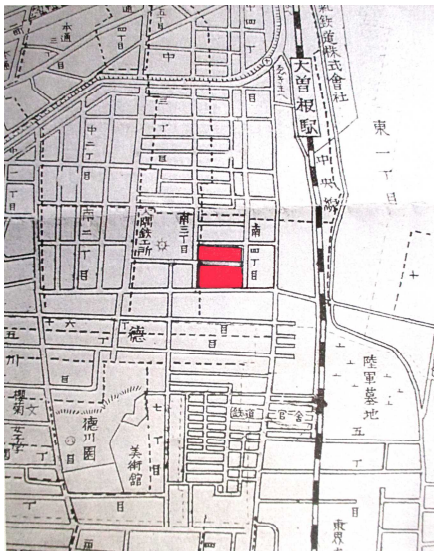


レーベルに「電気吹き込み」と書かれている
ツルレコードのレコード盤 レコード盤：個人蔵

■株式会社アサヒ蓄音器商会(ツルレコード)の概要

日本初の電気吹き込みレコードを成功させたのは、1925(大正14)年6月に名古屋市東区大曽根に設立されたアサヒ蓄音器商会である。名古屋初のレコード製作会社で、商標にツルのマークを使用したので「ツルレコード」(正式商標名:ツル印レコード)の愛称で呼ばれた。同社はコロビア、ビクターなど外資系レコード会社の東京一極化に対抗、競争で苦戦したが、大正末期から昭和の激動の時代に名古屋音楽文化の興隆を担った。戦時中は軍歌などを発売し経営を続けたが、ジャズなど欧米系の演奏が禁止されたので1943(昭和18)年に閉鎖した。

- (1) 所在地:名古屋市東区大曽根町南4丁目170番、171番
- (2) 資本金:25万円
- (3) 設立者:2代目神野金之助はじめ3名、神野金之助は名古屋放送局理事長で名古屋鉄道社長、名古屋商工会議所会頭などを歴任した。同社の経営には表面的には関係せず、義兄に当たる神野三郎が社長に就任した。



アサヒ蓄音器商会大曽根工場所在地
(登記簿に基づき筆者が作成)

■ツルレコードの多彩な人材

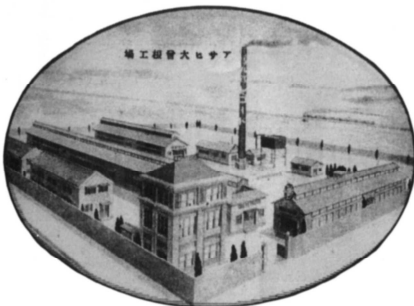
アサヒ蓄音器商会は社長神野三郎の統率の下に営業を開始、そのレコードに「ツル」のマークを付して発売した。当初の専属歌手として、

①鳥取春陽:鳥取春陽の最大のヒット曲は、「籠の鳥」(作詞:千野かほる、作曲:鳥取春陽)で映画化もされ一世を風靡した。その他、「船頭小唄」(作詞:野口雨情、作曲:中山晋平)などもある。

②黒田進:黒田進は利根の「舟唄」(作詞:松坂直美、作曲:黒田進)などを

小編成のオーケストラで電気吹き込みのレコードを発売した。

東京と大阪の間に位置する名古屋のスタジオに服部良一・藤山一郎・松島詩子・楠木敏夫など多くのタレントが立ち寄り、レコードに吹き込み、業界に一大勢力を構築した。さらにツルレコードに携わった昭和流行歌黎明期の歌手として御三家と言われた藤山一郎、東海林太郎、黒田進、テイチクの三羽鳥と言われたデューク・ミネ、藤山一郎、楠木敏夫など多彩な人材がいた。



アサヒ蓄音器商会大曽根工場のイラスト(左)と当時の広告(右)



出典:菊池清麿『ツルレコード昭和流行歌物語』2015

(寺沢安正)